

ディスコース分析の過程と視点 —ライフストーリー分析の振り返りより—

糟屋 美千子
社会環境部門

Processes and perspectives in discourse analysis: Reflecting on a life-story analysis

Michiko KASUYA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: This study reflected on the processes and perspectives involved in a discourse analysis of the talk of a person with experiences in an orphanage (Kasuya, 2019). It looked back on the analysis, which identified and examined the person's interpretive frameworks to understand the realities in his life-story. The exploration of the analytical procedures revealed that the analysis proceeded step by step and that the writing of the analysis helped the examination progress from one stage to the next. New viewpoints for the analysis emerged only after various elements of the data were integrated so as to perceive the entire picture of the life story. In turn, the understanding of the whole story contributed to a closer analysis of each part of the story. The study also showed the validity of the qualitative analysis was enhanced by respecting diverse aspects of the events in the life-story from multidimensional perspectives, as well as critically reflecting on the self as researcher and inquirer throughout the processes of the analysis.

Keywords: discourse analysis, processes, qualitative analysis, validity, multidimensional perspectives, self-reflexivity

1. はじめに

本研究は、ディスコース分析の手法によってライフストーリーを分析した研究(糟屋, 2019)の分析過程を振り返り、その手順と視点を明らかにすることを目的とする。

糟屋(2019)は、児童養護施設経験者Aさんの語りをディスコース分析し、語り手の現実の捉え方を明らかにし、物事についての考え方を作る時に重要な役割を果たす「重みづけ」「因果関係の設定」「登場人物の属性」の3つの視点(糟屋, 2012; 2014)から語り手の考え方の枠組みを検討した。分析の結果、語りは「愛する」ということがテーマになっており、語り手は「愛されなかったので、愛せない」という解釈を述べていると考えられたが、実際には

「愛されたので、愛せる」という別の見方も可能であると思われた。また、こうした考え方の枠組みは、語り手個人の経験だけに基づくものではなく、社会文化的要因や認知的要因の影響を受けたものではないかと推測された。

こうしたディスコース分析の研究は、通常、その分析結果及び結果についての考察が報告されるが、そこに至った様々な手続きや段階を明示したものはほとんどない。糟屋(2019)も、論文の目的が分析結果を示すことであったことから、具体的にどのように分析が進められていったかの手順は十分に述べていない。本稿ではその分析過程を明らかにし、ディスコース分析の具体的な詳細な手順の1例を示すことを目的としている。また、分析の手順を示したうえ

で、それぞれの段階が質的研究の質を高めるという意味でどのような位置づけにあるか、質的研究としてのディスコース分析が、研究の質を高めるためにどのようなことが可能なのかについても考察したい。

本論文の構成は以下の通りである。2では、本研究の目的と手法を提示する。3では、分析プロセスを段階ごとに振り返り、各段階でどのようなことが行なわれ、分析がどのように進化したのかを明らかにし、それぞれの段階がどのような意味を持つのかを検討する。4では、分析プロセス全体についてまとめて考察し、質的研究の質の評価という観点から分析プロセスを検討する。

2. 本研究の目的と手法

「1. はじめに」で述べたように、本研究は、ディスコース分析の手法によってライフストーリーを分析した研究(糟屋, 2019)の分析過程を振り返り、その手順と視点を明らかにすることを目的としている。この研究を思い至った経緯は以下のとおりである。

筆者は、専門はディスコース分析、特にクリティカル・ディスコース分析であるが、通常はメディア・ディスコースを分析対象としていて、糟屋(2019)のようなライフストーリーの分析はしていない。そこで、今回の分析を行なうに際して、心理学の質的研究の分析手法などを探したが、グラウンデッドセオリー・アプローチ、KJ法などの分析の手順はかなり詳しい文献があったが、ディスコース分析の具体的方法については、手法の紹介が主で、その分析の過程を微細に記録したものは見つからず、ディスコース分析については、まだ手探りであるということを知った。そのため、ふだんメディア・ディスコースを対象として行なっている分析の方法をもとに、試行錯誤しながら分析を進めていかざるをえなかった。

糟屋(2019)で示した分析結果と考察は、最初からその形で結果や考察が出てきたわけではなく、様々な手順や段階を踏んで、そこに至った。しかし、糟屋(2019)の中では、考え方の枠組みの分析結果や結果についての考察が論文の目的であったため、そこに至った分析プロセス(道のり)については簡単にまとめているにすぎない。そこで、分析がどのように行なわれたかをあらためて振り返り、分析の手法や手順を明らかにして詳細に示すことで、ディスコース研究に貢献できることがあるのではないかと考えた。能智(2011)が指摘するように、質的研究の方法や手続きは、「固定的で絶対的なものというよりも」、「データに向かい合う中で選択され、場合によっては修正が加えられるべきもの」(p. 271)であるので、1つの分析がデータと向かい合う中で、どう進行していったかの詳細な例を示

すことが、ディスコース研究の参考になることがあるのではないかと考えた。

もう1つ、この分析の過程をまとめてみようと思いついた理由には、質的研究としてのディスコース分析の質の評価について考えてみようと思ったことがある。ディスコース分析の具体的な各段階が質的研究の質を高めるという意味でどういう位置づけにあるかを整理し、まとめておくことで、ディスコース分析を行なう人が自分のディスコース分析の質的研究としての質について考える際に役に立つことがあるのではないかと考えた。

本研究の具体的な手法であるが、次の2つの方法で分析過程を振り返っていく。1つは、筆者がディスコース分析をした際に、自分の考えをまとめていた分析ノート、スクリプトの余白に書き込んだ分析メモの記録、原稿を書き始めてから最終版に至るまでの様々な段階での原稿(日付の書かれたもの)とその余白への書き込みを見て、分析のプロセスや筆者の気づきを辿っていくというものである。もう1つは、筆者の分析結果を振り返り、どうやってそこに辿り着いたかを考えてみるという方法である。この2つの道筋は、関連してはいるが、少し違うものである。筆者は糟屋(2019)の分析を、1つの旅のように感じていた。そして、本稿の分析の前者の方法は、分析の過程(旅)を自分のメモやノートとともにもう一度歩んでみる方法であり、後者の方法は、旅の終点から、どんな道を行ってそこに辿りついたのかを考えてみる、という方法である。つまり、今回の研究は、自分自身の研究の旅の振り返りであり、自分の研究を意識的に経験し直すもう1つの新たな旅であると言える。

本研究は、以下のような問いを持って進めていく。まず、ディスコース分析は、質的データの研究方法を大きくカテゴリー分析とシーケンス分析に分けた場合、シーケンス分析に含まれる。カテゴリー分析がデータを「短い部分に分けたり部分を要約したりしながら、データの概念化・カテゴリー化を進めていく」(能智, 2011, p. 250)のに対して、シーケンス分析は語りを「分ちがたい複雑なつながりを様々な方向に持つ織物(テキスト)」と考へて、「データに様々な方向のつながりや関係を見出し、こうとする」特徴がある(能智, 2011, p. 262)。本研究では、こうした「複雑な」「様々な方向のつながりや関係」は、ディスコース分析の中で、具体的にどのような手順を踏んで解き明かしていくことができるのかを明らかにしたい。

また、ディスコース分析の「ディスコース」という語は、言葉を、人と人とのやり取りにおいて「何かの働きをする」もの(鈴木, 2007, p. 61)と捉えたものであり、「何らか

のまとまりのある意味を伝える言語行動の断片」(メイナード, 1997, p. 13)、「コミュニケーションのための言語使用」(Cook, 1989, p. 6)、「他の要素と相互に密接に関係している、社会生活の一要素」(Fairclough, 2003, p. 3)、「現実を社会的に構築するもの、知識を形作るもの」(Fairclough, 1995, p. 18)として捉えた用語である。

「何かの働きをするもの」「何かのまとまりのある意味」「現実を社会的に構築するもの」は、どのような分析プロセスによって明らかにすることができるかを、本研究では見ていきたい。

さらに、こうした点について、ディスコース分析の手法について書かれたものを見ると、「不完全な円に完全な円を見る」、「抽象的な何か」を「頭の中に作り上げる」(鈴木, 2007, p. 158)などと書かれている。質的研究法でも、質的研究の結果出てくる命題を、「データの向こう側にあると想定される「意味」「文脈のなかで浮かび上がってくる独特な意味」「データの背後にある特定事例の全体像」「事例を越えた抽象的な何か」「直接のデータを越えた何か」などと描写している(能智, 2005, pp. 89-90)。そうした「独特な意味」や「全体像」に関して、Rapley (2018)の「研究が進行する中で、その場限りに偶然に現れる」(p. 141)、鈴木(2007)の「ふとした拍子に見えてくる」(p. 158)や、能智(2011)などの言う「セレンディピティ」(「思いがけないところで新たな発見をする」「新たなアイデアや意外な発想が現れる」(p. 242))というのは、筆者の研究では何がそれに当たるのか、を明らかにしたい。分析を振り返って、ある段階であることがわかるようになるが、その前はなぜ気づかなかったのか、どうして、その時に気づいたのか、を考えていきたい。おそらく、その時点で要素がそろった、つまり、それまでにあったつながらない小さな気づき同士の関係が、ある要素に気づくことで初めてわかるようになった、ということだろうと考えられるが、具体的に何が起きていたのかをできるだけ詳細に描写したいと思う。

ディスコース分析において、「自分自身の分析や書く実践について内省する」ことの重要性は、Rapley (2018, p. 145)でも指摘されているが、このように、自分自身の分析を振り返ると、分析していた時は意識していなかったが、考えてみるとこういうことをやっていたとわかることがあるだろう。特に、大きな飛躍があったと自分が感じた時、なぜそうなったのか、どうしてそれまではそれができなかったのか、ということが少しでもわかると、次に分析する時や、他の人がディスコース分析の手法で分析をしてみようと思った時など、どのように進めることができるのかについてのヒントとなると思われる。

以下、糟屋(2019)に即して、具体的にどのように分析したのかを見る。そして、本分析以外のテキストに転用できるように、分析プロセスが何をしていたのか、どういう意味があるのか、他のテキストにも共通して適用できる手法を考えてみたい。

3. 振り返りの結果：ディスコース分析の過程

3.1 分析過程の全体の流れ

ディスコース分析(糟屋, 2019)の分析過程を振り返った結果、そのプロセスを段階別に整理してみると、以下の①から⑨に分けることができた。これを大きく分けると、(1)分析の準備、(2)データ分析、(3)分析結果の考察の3段階になる。

(1) 分析の準備

- ① 分析の場を整える：スクリプトを整える
- ② データ全体の構成を理解する
- ③ 全体を貫くテーマに気づく
- ④ 全体を貫くテーマを理解する

(2) データ分析

- ⑤ 語りを微細に見る(語り手の現実の捉え方)
- ⑥ 語りを微細に見る(語りの中にある別の捉え方)

(3) 分析結果の考察

- ⑦ 捉え方の妥当性を検討する
- ⑧ 考え方の社会文化的・認知的要因を検討する
- ⑨ 分析・考察の内容について内省する

このうち、①から④が「(1)分析の準備」の段階である。これは準備段階と言っても、極めて重要な部分で、この部分がないとその先の分析には進めない部分である。分析のアイデアのようなものが自由に、いろいろ出てくる段階である。特に、③、④では、繰り返しデータを読むことで暫定的なテーマが見つかり、ある程度理解ができる部分である。⑤、⑥が「(2)本格的なデータ分析」の段階である。これは、微細で緻密な分析を行なう部分であり、⑤、⑥を行なうことで、その前の③、④のテーマの理解が進み、それによって、さらに⑤、⑥の分析が深まる、という循環がある部分である。⑦、⑧、⑨が「(3)分析結果の考察」の段階である。⑦、⑧で考察を行なうことで、また⑤、⑥が深まるということもあり、ここでも循環がある。例えば、③、④ではある側面に気づいていたが、その後、⑤、⑥で別の側面に気づくことで③、④の改訂版ができる。また、⑦、⑧、⑨でまた別の側面

についての気づきがあることで、⑤、⑥の改訂版ができるということがある。⑤、⑥、⑦、⑧では、「重みづけ」「因果関係の設定」「登場人物の属性」の3つの視点(糟屋, 2012; 2014)という分析手法を使い、分析を深め、分析結果の検討を行なう。⑤、⑥での3つの視点は分析の妥当性を高めることにつながる。また、⑦、⑧での3つの視点での検討は、別の新しい見方を見つける契機になる部分である。これら、①から⑨のプロセスは、今回の分析のテキストに限らず、他のテキストの分析にも当てはまる共通の方法と言えると考えられる。

①から⑨の段階は、だいたいこの順番で進んだが、先に述べたように、循環的に行きつ戻りつして進行するものである。また、後半のものが、アイデアとして、ぼんやりと早い段階で発想されたものもある。以下、それぞれの段階について、大きく「3.2 (1) 分析の準備の段階」「3.3 (2) データ分析の段階」「3.4 (3) 分析結果の考察の段階」の3つに分け、それぞれ、どのように分析が進んでいったか、それぞれの段階がどのような意味を持つのかを具体的に述べる。

3.2 (1) 分析の準備の段階

まず、「(1) 分析の準備の段階」と言える部分として、①から④の段階を振り返る。広く捉えれば、この段階ではもう分析は始まっているとも言えるが、⑤、⑥などの本格的な分析が始まる前の段階ということで「分析の準備の段階」とした。

① 分析の場を整える：スクリプトを整える

データ分析の準備として、まず行なう必要があることは、分析の場を整えることである。具体的には、2つのことをする。話者の交替ごとに区切って番号を振ることと、余白を作ることである。こうすることで、全体の枠組みや、相互の関係が見やすくなる。また、言葉の背景にあるテーマの存在を感じやすくなる。以下、順に詳しく述べる。

まず、話者ごとに区切って番号を振る。最初のAさんの言葉を1、次の面談者の言葉を2というように、順番に番号を振った。すべての語りに番号をつけることが目的なので、1つの語りが単語1つの短いものでも、文がいくつも続く長いものでも同じように、番号を振っていった。誰が話しているかが分析途中でわかりやすくなるように、Aさんの言葉を「A1」「A3」、面談者の言葉を「B2」「B4」などとする工夫をした。

このように番号を振ることの意味をあらためて考えてみると、いくつかの効果がある。まず、語りの中のすべての言葉に番号があることで、全体の中での位置情報を住所

(番地)のように位置づけることができ把握しやすくなり、アクセスしやすくなる。地図ができて、混沌としたものが位置が決まって落ち着いた感じになる。そして、どこを分析していても、その言葉がどの位置にあるかが意識されるため、全体を見るという視点が生まれ、全体の枠組みを捉えやすくなる。能智(2004)は、質的研究においては、データの「部分の意味は全体の文脈のなかで浮かび上がってくるもの」と、「データ全体を十分頭に入れておく」(p. 280)ことの重要性を指摘しているが、今回の分析では、全体の構成を理解することを、次の②の段階で行なった。そのための準備としても、この番号をつける作業は重要であると考えられる。

また、番号があると、異なる部分を分析している時に、部分間のつながりが描写しやすくなる。ある部分の分析を描写する際に、他の部分との関連や類似性などを引用して記述しやすくなるだけでなく、その関連する部分を背景も含めて見やすくなり、分析の視野に入りやすくなる。例えば、「A9とA23とA41では、本来あるべきものが「ない」というような欠損を表す表現が繰り返して出てくる」のように書くことができる。こうすることで、論文中に引用する時にその部分の内容をすべて直接に引用しなくてもよくなり、簡単に指し示すことができ、簡潔に表現できるので読み手も読みやすくなる。同様に、分析過程でも、個々の部分の詳しい内容からいったん離れて番号で代表させることで記憶の負担を軽くすることができ、その結果、複雑なものを扱えるようになる。また、いくつかの部分の分析したあとに、それらをまとめて類似点・相違点・関連性などを述べる時にも、セクションと番号を示しておけば、分析者が整理しやすいだけでなく、読者は必要ならばそのセクションに書かれている詳しい説明を読むこともできる。こうすることで、背景を含めて、2つ以上の部分をまとめて見ることが容易になり、より分析・考察が深まる。こうやって、部分から全体へ、全体から部分へという分析が進めやすくなる。相互の関連が見やすくなり、そのことから、分析の負担も軽減できるように思う。

このように番号を振ることで、部分間の相互関係が見やすくなるという一方で、1つ1つの部分が独立し、ばらばらになって自由になる感じがある。しかも、それぞれが対等の重要性を与えられる。こうすることは、このあと述べる、データの自由な読みにつながると思われる。また、それぞれの部分が1つの番号を与えられることで、最初見たときに大事だと思わなかった部分も、きちんと自分の位置を持っていて最後まで消えてしまうことがないので、実はそこが大事な部分だったとあとで気づくようなことがある。これは、4.2で述べるような、分析する際にストーリーのす

すべての要素を大切にし、公平に扱う姿勢である「公正さ (fairness)」(Guba & Lincoln, 2005, p. 207) につながると思える。

分析の場としてのスクリプトを整えるうえで、もう1つ重要なことは、印刷のレイアウトで行間の幅や余白を十分に広くとっておくことである。鈴木 (2007) も余白と行間の広さの重要性を「後で書き込みをしたりアンダーラインを引いたりしやすくなる」(p. 143) として重視している。なぜ、余白が大事であるかをあらためて考えてみると、余白があることで、気づいたことをそこにメモしやすくなるということはもちろんだが、それ以上のことがあるように思う。

余白があることで、言葉で表現されていること以外に何かがあることを、視覚的にイメージしやすくなる。また、余白があることで、分析者に気持ちの余裕が生まれ、分析自体は微細であるが、一方でおおらかな気持ちで分析ができるように思う。これは、カウンセラーがクライアントに向かって話を聞くときに共感と理解の姿勢で傾聴することや、教員が学生に対して興味と関心と尊重の心を持って向き合うことなど通じるものがあるかもしれない。このように、余裕を持ってデータと向き合うことの重要性は、能智 (2011) でも指摘されている。能智 (2011) は、質的研究について「データとの出会いの場では、あわてて目標に突進するのではなく、余裕を持ってデータと向かい合う時間を持ちたい」として、その理由として、余裕を持つことで、思いがけない発見や新たなアイデアや発想が現れがちであることに加え、データと向かい合うことで「自分の視点自体も変化していく」こと、そのためには、「一方的に自分の視点を押しつけるのではない」「自由な読みが必要」であることを挙げている (pp. 242-243)。このあと説明する、②、③、④の「分析の準備」や分析そのものでも、ゆっくりしたペースを保っていくことが重要であると思われる。そういう意味でも、印刷する時の余白や行間の十分な広さが重要な意味を持つと思う。こうした「一方的に自分の視点を押しつけるのではない」態度は、4.2で述べる、研究者と研究参加者との「倫理的関係 (ethical relationship)」(Guba & Lincoln, 2005, p. 209) につながる点である。

② データ全体の構成を理解する

分析の場が整ったら、スクリプトを繰り返し読み返す。スクリプトを読んでも、最初はほとんど意味がわからないという段階があった。この時点では、このように、「わからない」という感覚を大切に持ちながら、「この語りはどんなストーリーなのだろう」という漠然とした問いがある

状態である。しかし、2回、3回、数回読むと、意味がわかるどころが少しずつ増えていき、それを頼りに、また最初から読むと、なんとなく全体がわかるようになってきて、それからまた読むと、また新たにわかるところが出てくる。このように全体がわかると、部分がわかるようになり、わかる部分が増えると、また全体がわかるようになる、ということが円環的に進んでいく。1日に何度も読むこともあれば、数日おいて、または数週間おいて読むというように時間を空けて読むこともあった。これは、データから、また以前データを読んだ自分自身から少し距離を置いて読むということだと思ふ。

時間を空けて読むことで、その時の自分の置かれている状況や気分・調子などがいろいろ違ってくる。朝読んだり、仕事のあとに読んだり、家で読んだり、職場で読んだり、のんびり読んだり、疲れている時に読んだりする。そのようにいろいろな読み方を試してみると、気になることや気づくことが変わってきて、異なる読み方ができ、新たな発見につながることもあるように思う。このように、分析者が様々な空間・時間に、様々な状態でデータと向き合うことは、様々な経験をしてきた分析者が、多様な側面を持つ存在としてデータに向き合うことを可能にしているのではないだろうか。分析者は様々な側面・視点を持っていて、それが空間や時間を変えてデータと向き合うことで出てくるということではないか。これは、4.2で述べる「自己省察 (self-reflexivity)」(Guba & Lincoln, 2005, p. 210) に関わる点であると思える。

どれくらい、どのようなことに気づいていったかを、分析時のメモで具体的に振り返ってみる。かなり早い段階で、第一印象やスクリプトを読んだ感想程度のもので、気づいたことのメモの中の1つに「愛されなかったと思っていて、それが辛いのかな」というような気づきがある。また、「小さいけど愛はあったと思うけど」、というようなことも書いてある。しかし、それが最初から中核のものとなっていたわけではない。これが鍵となる中核的なテーマではないかと思うようになるのは、次の③の段階である。

データを理解するに際しては、まず、おおまかな全体の構成 (始まりと終わり、その中にある様々な出来事) を捉えることが、データの理解を助けた。では、それをどうやったかを振り返ってみる。まず、全体の大きな連なりを見てみようとしたが、最初のうちは、エピソード (出来事) がいろいろあって全体がわかりにくいと感じた。そのために、エピソードについてスクリプトの余白にメモを取ったり、話題が変わると区切りの印を入れた。そして、どんな出来事が話の中で語られているかを把握するために、出来

事を 1 行程程度の短い文でまとめて順に書き出してみた。全部で 24 のエピソードがあり、話の順に番号をつけたが、この時点では、これらのエピソードにはまとまりはなく、相互のつながりや関連性などは理解できていない。しかし、24 のエピソードのリストを 1 ページで見ることができるので、全体を見渡すことができる。このように、1 時間ぐらいの長いインタビューの内容の全体を見渡す工夫をしている。なお、ここでつけたエピソードの番号については、それ以降、分析では使用していない。

その後、語り全体を時系列に 3 つのパート (①施設に入る前から小学校時代、②中学校・高校、③高校卒業後施設を出てから) に分けることにした。これで分析の負担が少し減ったと感じた。これは、とりあえず、時系列ではあるが、出来事が 3 つのパートに分かれるという枠組みができたことで、それぞれのエピソードの位置づけが少し安定して、全体を見通せるような気がしたことと関係あるように思う。この 3 つに分けたのは、なんとなくではあるが、語りの内容がまとまっていると思われたからである。また語りがかたい時系列になっていて、分けやすかったということもある。今回の分析は時系列で分けたが、必ずしも、時系列で分ける必要はなく、話のテーマで分けることもできると思う。ただ、この段階では、まだ分析が進んでいないので、テーマで分けてしまうと、テーマがこの段階で固定してしまうという問題点があるように思う。また、分析の負担が少し減ったと感じられたのは、24 というエピソードの大きな数では把握しきれないことが、3 つの大きなパートという把握しやすい数に収まったということがあるかもしれない。最終的な分析のまとめでは、この時系列の枠組みでは語りをまとめていないのであるが、全体をとらえる目的で暫定的に 1 つの枠組みとして使用したことの意味はあったと思う。

こうやって、少しずつ、データ全体の構造を理解していった。スクリプトを何度も読み直しているうちに、おおまかな全体の構造を理解するようになった。今回の分析の場合は、分析対象の語りは、面接者と語り手の共同で作成されている大きな語りであるが、Labov (1972) の語りの分析で言うと、インタビューの始まりと終わりがあり、途中に様々な出来事の部分がある。このデータでは、出来事がかたい時系列になっていて、それぞれの出来事に始まりと出来事の内容と評価と終わりがあるというように入れ子の状態になっていることに気づいていった。以上の構造をまとめると以下ようになる。

インタビューの開始

インタビューの中身(出来事) →

(1)施設に入る前から小学校時代

出来事1→ 始まり

出来事の内容やそのことへの評価
終わり

出来事2

出来事3

(2)中学校・高校

出来事

(3)高校卒業後施設を出てから

出来事

インタビューの終了

このように、②の段階では全体を見渡す様々な努力をしている。このあと、③、④で出てくるテーマではなくて、できるだけ語りの原型の状態でも語りの枠組みを捉えようと努力をしている段階である。これも、①と同様に、語りのすべての要素を大切にする「公正さ」と関わっている。以上のような、全体をつかもうとしてできた暫定的な枠組みは、最終的な分析結果では表面に表れてこない枠組みであるが、データを理解して分析するために重要な意味を持つと考えられる。

③ 全体を貫くテーマに気づく

次の段階は、全体の枠組みがかたい理解できてから、またスクリプトを繰り返し読むことで、最初は気づけなかった、全体を貫くテーマのようなものが見えてくる段階である。全体を意識して読むことで、各部分が独立しているのではなく、互いに関係していて、何かまとまった意味、テーマのようなものを伝えていると感じるようになる。

どうやってテーマに気づいていったかをあらためて振り返ってみると、まず、時系列の枠組みができたところで、スクリプトで気になるところ、引っかかるところ、繰り返し現れる表現などに下線を引く。どんなところに線を引いているかをスクリプトで見ると、特に、語り手の感情や、出来事への評価などが表れているところに注目している。繰り返し読んで線を引いたりメモをしていると、余白が気づいたことの書き込みでいっぱいになって見にくくなっていくので、見にくくなってしまいう前に、プリントアウトした別のスクリプトに気づいたことの書き込みをするようにする。その場合、スクリプトにどれがいつの分析かわかるように日付を付けておくと、自分の分析(思考)の変化が時系列でわかり、安心感があるように思う。能智 (2011) は、思考の経路を残すために覚書きとしてメモを取っておくことが次の分析で役立つと言っている。筆者は、思考やアイデアが次々と現れては、消えていくことを感じ取って

いて、それを残すためにできるだけメモを取っていた。他のテキストの分析においても、分析が進む中で前に考えたことを辿るために、メモを読み返すことは通常よくやることである。また、その分析とは別のものを分析している時に、メモを読み返して、何かのヒントになることもよくあることである。それは、だんだん熟成して、自分の中ですっきりしてくるということと関係あるように思う。また、別のデータを分析している時は、別の視点で物事を見ているので、それが新たなことに気づくことを可能にするということもあるのではないかと思う。

スクリプトを読んでいて、疑問に思ったことには、「なぜ?」「どういう意味?」「?」などとメモする。このあたりの段階で、気づいたこと、気になったことなどをすべて紙に書き出してみる。その後、少し整理してパソコンに打ち込んでプリントアウトしておくで混乱していた思考が少し整理される。このように、繰り返しスクリプトを読んでいて、なんとなく気になることや、感想のようなものを書いてまとめておいた。そのまとめたものを読み返してみると、また気になることが出てきて、それをメモしてまとめてみる。これを繰り返すことで、大事なことが浮かび上がってきたように思う。考えついたことを自由に手書きでメモしていくという、のびのびと思考が拡散していくような作業と、それをパソコンのファイルなどにすっきりとまとめて整理するという、注意深く思考を収束させていく緻密な作業を、同時に行なうのではなくて、別の時に行なって、それらを循環させることが思考を前に進めるのに役立ったように思う。まとめた時のファイルのタイトルは、「いくつかのヒント」「これからできそうなこと」「気づきメモ」「今気づいていることの箇条書き」などである。

この頃、語りを読み返すと、全体的に苦しい感じがして、それはなぜだろうと疑問に思うようになった。この段階では、②で漠然と「どんなストーリーなのだろう」という問いでテキストを見ていたのとは、問いが変化してより具体的になってきている。メモを振り返って、どういうところが気になったかを見てみると、矛盾点・相違点に着目している。具体的には、語りの最後の方で、今後の不安なことを子育てなどの生活の具体的なことと答えていることと、語りの前の方で「生まれてこなければよかった」と言っていることに、ことの重大さが合わないと感じ、語り手の心の中にある深い苦しみの存在を考えるようになっていたということがあった。

この段階では、語りの中で矛盾しているように感じられたことや、語り手の現実の捉え方と語りから筆者が読み取った疑問や腑に落ちないことなどに注目していた。特に、語りの中で示している人や物事や出来事に対する評価や

気持ちが表れているところをていねいに見るようになっていった。全体を貫くテーマのようなものの存在に気づき、問いが少し変化し具体的になっていった段階である。

④ 全体を貫くテーマを理解する

そうやって語りを繰り返し読んでいくうちに、語りに繰り返し何度も現れる重要なテーマとして、「自分は愛されてこなかったので、人を愛することができない」があるのではないかと思うようになった。これは、それまでわからなかったことが見えてきたというような、分析の過程の中で大きな出来事だったと思う。どうやって気づいたかを振り返ってみると、何度も読み直しているうちに、同じテーマが一貫して繰り返し表れているような気がして、そのことと、語り手の苦しみが関係しているのではないかと思うようになった。なぜ関係していると思ったかを振り返ってみると、この頃はあまり意識していなかったが、「～ではない」「～がない」というような欠損を表す表現が多く使われていて、また、一方で語り全体に感じられた苦しい感じがあった。それで、何かあるべきものが足りないということと苦しいということはつながっているように思ったのかもしれない。ただ、それは、現時点で分析を振り返って思うことで、この頃は、そこまで意識していなかったと思う。当時のメモを見返してみると、「苦しんでいる」ということを感じ取り、同時に、「愛されなかったと感じている」と書いている。それで、その2つを結びつけてみた、ということかもしれない。

そこで、「愛する」というテーマで語りを読み直してみることに思い至り、何度も読み直しているうちに、1つの矛盾に気づいていった。それは、語りが、「愛されてこなかったので、愛することができない」という主題を繰り返し提示する一方で、その語りを注意深く見ると、「これまでも多くの人に愛されてきた。そして、多くの人を愛してきた」ことを示す出来事の内容が数多くあると思われたことである。そこで、筆者は「愛する」ということをあらためて考えてみることにした。社会心理学者のフロム(1991)は、「愛」を人間が孤立を克服して他者との一体感を得るという、人間の実存の問題への本質的な答えとして捉えて、愛の基本的要素として「配慮」「責任」「尊重」「知」の4つを挙げている。こうした「愛」の捉え方が参考になると考え、フロムの定義に基づいて分析していくことにした。このように、愛の定義にフロムの社会的で多面的な広いもの(「配慮」「責任」「尊重」「知」)を用いることで、テーマの理解を深めることができ、語りの中に、様々な形の、多様な人との関わりの中での「愛」があることに気づくことにつながっていった。

以上が、次の微細な分析に入る前の「(1) 分析の準備の段階」と言えるものである。分析のための発想をいろいろ巡らして、全体の姿、「データの背後にある特定事例の全体像」(能智, 2005, p.90)、テーマと言えるもの、をつかもうとしている段階である。エピソードごとに見たり、時系列に見たりして、暫定的な枠組みをいろいろ作ってみて、全体を見渡す努力をしている。語りの文に番号を振ったり余白を十分にとったりして分析の場を整えることで、全体の中の部分のつながりが見えやすくなり、このあとに続く分析や考察の段階が進めやすくなるということだけでなく、余裕を持って、語りのすべての要素を公平に大切に扱おうとする分析者の姿勢にも影響を与える、重要な準備が整う段階である。この段階のように、複雑なデータの中にテーマを見つける際には混乱することもあるので、ゆったりと思考を巡らす必要がある。

繰り返し語りを読むことで、分析者の中にある、これまでの知識や思考や経験など様々な要素が出てきて、それが直観やひらめきにつながる段階である。そうした直観やひらめきには、語りの中に貫して表れているものや分析者が共感する部分と同様に、語りの中の矛盾、分析者が漸く落ちないと感じるところ、語り手と分析者の出来事についての解釈の違いがあるところがヒントになっていた。このように、この準備の段階では、疑問に思ったり、混乱をしつつも、全体が一つのテーマに収束していくということが起こっている。

3.3 (2) データ分析の段階

次に、「(2) データ分析の段階」として、⑤、⑥に進む。データを詳細に見て、微細な分析を行なう段階である。

⑤ 語りを微細に見る (語り手の現実の捉え方)

ここでは、まず、語りで、「(1) 分析の準備の段階」で出てきたテーマである「愛」について、「愛されなかった」「愛された」「愛せない」「愛せる」の4つの点に関連している部分をすべて抽出した。具体的には、4色に色分けして、スクリプトの関連すると思われるすべての箇所に線を引き、キーワードと思われる言葉をそのまま色分けして余白に書き出した。こうすることで、「愛されなかった」「愛された」「愛せない」「愛せる」という4つの点に関すると思われる言葉が視覚的に見渡せるようになった。4色で示されることで、語りの中におけるそれぞれの量やちらばり、異なる要素が交互に現れることなどが視覚的にわかるようになった。また、スクリプトの言葉を読んで、強く「愛」に関すると思ったところには、「愛」「厳しい愛」など言葉の横に追加して書いたり、また、関連するかどうかわか

らない部分には、「愛?」「実は愛?」「愛してほしい?」などとメモした。これは、振り返ってみると、④で、「ふとした拍子に見えてくる」「独特な意味」「データを越えた何か」についての仮説が生成され、それを語り全体の他のデータで検証しているという段階だと思う。今回、分析メモや原稿を振り返るまでは、この、関連するすべての部分を抽出するという作業が「データに基づいた分析」の中心になる部分だと考えていた。しかし、振り返ってみると、これは重要な作業ではあるが、分析の始まるの段階に過ぎないことがわかった。これについては、詳しくはのちに述べる。

次に、語り手の「愛されてこなかった」し、そのために、「愛することが難しい」という思いについて、分析の主な方法として用いた3つの視点である「重みづけ」「因果関係」「属性」などがどうなっているのかを検討した。そして、語り手が、「本来あるべきものがない」ということを、繰り返し述べることで強調していたことに気づいた(「重みづけ」)。また、このことを「ので」「から」のような「因果関係」を示す接続詞を使って、「愛せない」と結びつけて表現していたことに気づいた。ディスコース分析の考え方には、言葉(ディスコース)は「個人によって生み出されながら個人を作り上げ、さらには、社会や文化によって枠づけられながら社会や文化に影響を与える」(能智, 2011, p.263) というものがある。つまり、考えが言葉になり、言葉が考えになるという、言葉と考えの間に相互作用の関係があるとする立場である。そこで、語り手の解釈とは別の考え方の可能性もあるのではないかと、というようなことを考えていった。

この段階でできたことは、語り手の状況をある程度理解し、その苦しみ・悲しみを共有することである。このあたりから原稿を書き始めている。まず、初めの原稿を書くことで、ある部分の理解ができて、少しまとまる。次に、パソコン上に書いたものをプリントアウトして読むことで、自分が読者になって外から見るができる。そして、その原稿を読んで、気になったこと、気づいたこと、考えたことを余白に書き加え、それを含めて次の原稿を書く。さらに、それを読んで、また新たな気づきがある。というように、スクリプトを読んだ分析の段階だけでは完結しない、原稿を書きながらの分析が続く。分析が少し進み、テーマ(今回の分析では「愛」とそれを表す構造(今回は、語り手の解釈と分析者の解釈の違いなど)などがある程度わかったところで文章化を始めている。このような、原稿を書くことで、テーマや自己を発見し、分析が深まってくるといふ側面については、Richardson & St. Pierre (2005) も指摘している。

分析が全部終わって、何もかもわかってから書いているのではなく、初期の段階ではかなり粗い原稿を書いている。それを読み返して足りない所を補ったりしている。原稿に日付が書いてあるので、順番に読み返していくと、最初頃の原稿では、語り手の「愛されなかった」という気持ちを表わしていると考えられた部分をスクリプトから抜き出して並べて、簡単な見出しをつけてあるだけである。その部分の語りを読み返していくことで、「ない」「ない」という表現の繰り返しに気づき、余白に「ない」「ない」とメモがある。その後、なぜ、これらを「愛されなかった」という気持ちを表しているかと筆者が解釈したかの説明を書いていくことで、理解が進んでいった。

なぜ、③や④でスクリプトを見ていた時にはこれらの表現の繰り返しをはっきりと意識しなかったのに、この⑤の段階で気づいたかを考えてみると、スクリプトの時は、これらの表現が分散して出てきていたが、分析を原稿にし始めて、「愛されなかった」に関する部分をまとめて書くことで、集中して出てきたということがあると思う。また、これらの表現についての筆者の解釈を説明して書いているうちに、自分の中に深く入ってきて、特に気になるようになってきたということもあると思う。これは、4.2で述べる、質的研究の中で「テーマや自分を発見していく」という「自己省察」(Guba & Lincoln, 2005, p.210)に関わる部分であると思う。

初めの原稿を書き始めてからできあがるまでに2か月ぐらいかかっているが、この段階のメモや原稿を振り返ってみて気づいたことは、原稿の余白に書かれたメモが多いということである。スクリプトの状態でもメモがあるのと同じくらいか、むしろ、それ以上に、原稿になってからもメモ書きがあるので、原稿についても余白は大事だと思われる。十分な余白があることで、まだこれから分析が進むことを準備していることになる。分析についても説明を加えて書いていくことで、新たな気づきがある。またそれが、考察を深めることにつながっている。のちに⑦で述べるように、考察も書きながら考えが深まるということがあった。

なぜ、初期の分析では気づかなくて、あとで気づくのかを振り返ってみる。複雑なものが、ある程度まとまりになってくると、粗いけれども全体像ができ、そのことにより、前は見るができなかった部分も微細に見ることができるようになる。これは、能智(2011)が述べるように、「暫定的な秩序が与えられ、データの全体像がより理解しやすくなる」(p.254)ということが起きていると考えられる。筆者が語りの中で「愛ではないか」と思ったことを、⑤の初期の段階でスクリプトで全部書き上げてみるのも検証だが、その後、実際に原稿を書き始めて、簡単な説明

から詳細な説明に、読者にわかるように書いていくことで検証されることもある。目の前に読者はいないが、そういう意味では、原稿を書いている段階で読者がいて、その助けで検証が進んでいくということがある。ここでは、原稿を書くことによって理解が深まるということや、矛盾があったり説明できないことが明確になって、より深く考えられるようになるということが起きていた。

次の⑥の段階に進む前に、この、語り手の現実の捉え方をていねいに見るということが大切だと思う。この段階は、今回の分析ではAさんの捉え方をそのまま受け止める部分であり、他のテキストであったら、そのテキストの語り手や書き手の捉え方を受け止める部分と言える。

⑥ 語りを微細に見る(語りの中にある別の捉え方)

次の段階は、語りの中に見られる、語り手の捉え方とは別の捉え方の可能性を検討する段階である。特に、筆者の解釈と語り手の解釈の差があるところに注目した。具体的には、「愛されてきた」「愛せる」という部分である。ここでも、書くことで分析が進行していく。初期の原稿では、筆者が「愛」と思ったところ(語り手は愛と思っていないけれど)について、簡単な見出しの文とその語りの部分をスクリプトから抜き出して列挙してあるだけである。それを、なぜ「愛」と思ったかを説明して書いていくことで、理解が深まっていった。

まず、語りの中で「愛されてきた」ことを示すと考えられる部分について、「どのような場面でのような愛を受けてきたか」「語り手がそうした愛をどう評価しているか」「それらの愛が語り手にどのような影響を与えたか」など、筆者がテーマに関連して重要な意味を持つのではないかと考えた出来事、それらの出来事に対する語り手の評価、それらの出来事が語り手に及ぼしたと推測される影響をデータから見た。その結果、自分を助けてくれた人々に関わる出来事が多く語られるが、自分の中に愛を育てることになった要因として重視されず、むしろ憤りや残念さに焦点が合っているところが、筆者の解釈とは異なることに気づいた。また、語り手の中では、望んだときにそばにいてくれなかった人々(父親や母親)が現在の自分の存在に重要な意味を持つものとされているが、実際は、それぞれの時に目の前にいて愛を与えてくれた人々が、語り手の存在に深い痕跡を残しているのではないかと気づいていった。

こうやって、解釈の相違点を考えることで、「重みづけ」などの見直しにつながる可能性が考えられた。振り返ると、筆者の解釈と語り手の解釈の違いが分析を深めていく重要なきっかけ、飛躍のようなものになったと思う。このテキストに限らず、他のテキストを分析する際にも、契機、

裂け目、葛藤、差異のようなところにヒントがあるのではないかと考えられる。これは、弁証法のように、違う解釈をしているものの力を合わせて、より高いところ深いところに辿り着こうとしているようなものと言えるかもしれない。そういう意味では、こうした分析は、分析者と語り手の共同作業とも言え、直接目の前にいなくても、データ分析を通して交流がある。そこでは、語り手を助け、分析者を助けるという役割をお互いに果たすことが可能で、そこには、助けられる人と助ける人、というような立場の上下はないのではないかと。そして、そのようにして初めてできた分析結果や考察や、本稿のような振り返りの結果を誰かが読んで、また誰かの役に立つかもしれない。そこにもまた、間接的な共同作業や交流が起きると考えられる。こうした面は、他のテキストのディスコース分析でも、意識するかどうかは別として、常に生じているように思う。

これは、4.2で述べる、研究参加者と研究者との倫理的関係に関わる部分であるが、研究参加者だけでなく論文の読者とも同じような関係があるのではないだろうか。今回、分析を振り返ることで、分析者・研究参加者・読者の間には相互扶助の関係、互いに与え合うという関係の可能性があると気づいた。そうした相互扶助の関係の可能性は、分析した語りの中だけでなく、その語りを分析した論文の中にも広がっているように思う。また、そうしたことに気づいていったのは、分析者が研究プロセスを通して「テーマや自分自身を発見していく」(Guba & Lincoln, 2005, p. 210) ことを示していると考えられる。

次に、語り手が「愛してきた」ことを示す部分を見た。ここでも、筆者の解釈と語り手の解釈の差があるところに注目した。語りの中には「愛することができない」という気持ちを示すものが繰り返して出てきたが、一方で、語りを見てみると、たくさんの愛を人々に与えてきたことを示すものが見つかり、単なる親密さではない、他者への「責任」「配慮」「尊重」「知」といった本質的な深い愛を与えてきたことが随所に見られた。筆者は、この「本質的な愛」とは、人々が見失ってきた大切なものを代表するのではないかと考えていた。今回の分析では、それを「愛」というテーマで見たが、他にもそういうものはあり、例えば、寛容、自己尊重、相互扶助などと表現されるものなど、人間にとって価値があり、生きていくために必要なものとされているものである。そういうものは、見えにくくなっているが、実際は身の回りにある。しかし、重みづけられなかったり、自分の存在に結びつけられなかったりして、ないがしろにされてしまっていることと関連していて、そのことが人々を抑圧し苦しめているのではないかと思った。このように、今回の分析の中核テーマである「愛」以外のものとの関連

を考えることは、4.2で述べる、他のデータへの転用可能性とも関わっていると考えられる。

また、語り手とは反対側の視点(語り手の世話をしてきた人々・学校の先生・友人など)から語り手を見ることも、語り手が気づけなかったと思われること(双方向の愛の存在)に気づききっかけとなった。これは、語りの中の「登場人物の属性」を考えるうえで、主人公ではない、脇役(第三者、彼、彼女)からの視点に立って見てみるということである。この発想は、ホワイト(2009)の「リ・メンバリング」という考えから得た。心理療法の中で、自分の人生の登場人物を自分で選び、ある人たちには特別な役割を与えてみる、そして、その人たちの視点から自分を見てみる、というような発想法である(p. 113)。

このような発想をしたのには、筆者に次のような下地があったからだと考えられる。フランクル(2002)が「夜と霧」で「自分が人生に何を期待するか」ではなく、「人生が自分に何を期待しているか」を考えるという「コペルニクス的転回」があった時に、生きる意味が変わるということを書いているのを読んでいた。また、アドラー(1984)が「自分が人生から何を得るか」を問うのではなく、「自分が他者に貢献する」と考えたときに、人生が違った見え方になるということを書いていたのも読んでいた。ホワイト(2009)が「すでに自分が与えてきたものにも価値をおくこと」や、「自分が関わってきた人の視点から見ること」の重要性を言っているのも読んでいた。

どれも、「自分の視点を変える、自分が得ることに焦点を当てるのではなく、人との関係の中で、自分が与えることができること、貢献できることに焦点を当てる」というようなことを言っていると思う。それを今回はフロムの「愛する」という視点を使って見てみたということだと思う。相手を尊重する「愛」というのは、自分中心ではなく相手から見ることが前提になっている。このように、この研究の気づきの背景には、筆者のそれまでの様々な思考と知識と経験が基盤となっていたと言える。Rapley(2018)も、トピックに関する学術的・非学術的な多様な文献の読書が、ディスコース分析の「研究のありうる道筋、リサーチクエスション、分析のテーマやコードについての、何らかの最初の糸口を自分に与えてくれる」(p. 141)と述べている。質的研究においては、研究者も研究手法の一部であり、研究者の中の「さまざまな自己が研究の中で役割を果たす」ということは、Guba & Lincoln(2005, p. 210)も指摘している。

また、多様な視点から見ることは、4.2で述べる、分析の「公正さ(fairness)」と関わっている。語り手に関わった人たち、語り手が愛を与え、愛を受けてきた人たちの視

点から語り手を見てみることを試みている。筆者が、直接、それらの人々にインタビューをすることはできないという限界はあるが、語りの中ではテーマ（愛）に関わる存在として重視されていない存在も、分析の中で大切な存在として扱うことで、語りの様々な側面を重要なものとして取り上げるように努力している。

以上が、データを見て微細な分析を行なう「(2) データ分析の段階」である。ここでは、「(1) 分析の準備の段階」で出てきたテーマについての直観が、データによって、詳細に緻密に分析される段階であると言える。語りのすべての部分を包括的に見て、テーマに関係すると思われる部分を抽出し、直観で生み出されたテーマをデータで確かめ、洗練させる段階である。Rapley (2018) が述べるような、「考えや直観を一つ一つの新しいデータでチェックする」(p. 141)、「自分の主張や解釈が信頼でき、妥当で」、「議論がデータからの材料に基づいていると他者に確信させる」(p. 143)ように努力する部分に当たる。語り手の視点、語りの中に登場する人々の視点、分析者の視点（ここには、分析者がこれまで読んだもの、経験したのから得た視点が含まれる）など、様々な視点から、出来事を多面的に捉える努力をすることで、ディスコースに内在する、「複雑なつながりや関係」がより微細に明らかになっていく段階である。この段階は、書くことにより分析が進み、データの解釈を書いたものが読者に十分納得してもらえただけの説明になっているかを吟味して洗練させていくことで、より詳細な部分に分析者の目が届くようになり、語りの中の部分同士の繋がりにも新たに気づき、そのことにより全体の姿がより明確になっていく。

3.4 (3) 分析結果の考察の段階

ここから、「(3) 分析結果の考察の段階」の⑦、⑧、⑨を行なう。ディスコース分析では、分析自体が解釈を含むので、分析で考察の一部はすでに始まっているとも言え、⑤、⑥の分析と、⑦、⑧、⑨の考察の境目をはっきり分けることは難しい。ただ、筆者が意識している区別は、⑤、⑥の分析では直接データに関わることを扱い、それに対して、⑦、⑧、⑨では、データの理解によって明らかになった現実の捉え方について、妥当性や新たな可能性を考察するという、データの直接的な解釈から離れた部分がある検討を行なうということである。

⑦ 捉え方の妥当性を検討する

この段階では、語り手の現実の捉え方と、語りから見られることを合わせてみて、「重みづけ」「因果関係の設定」「登場人物の属性」の3つの視点（糟屋, 2012; 2014）で、

別の捉え方の可能性を検討した。そして、語り手の現実の捉え方は重みづけられた1つの側面に基づいており、語りの中には実際には他の多様な側面もあって、別の解釈も可能ではないかと考えた。例えば、出来事の因果関係の設定については、2つの出来事を「ので」という原因と結果を示す語で結びつけてしまうことで、その意味づけが固定化してしまう。これを別の因果関係の言葉で結びつけ直すことで、出来事への見方が変わるかもしれないと考えた。そして、「愛されなかったので愛せない」という解釈が、「愛されなかったけれども、愛せる」「愛されなかったので、愛せる」などの結びつけ方も可能であるかを、データの中にそのような出来事があるかを確認することで検討した。こうした考察についても、⑤、⑥の微細な分析と同様に、考察の根拠や説明を書くことで理解が進み、考察が深まっていくということが起きていた。

また、本稿での分析の振り返りを書いていて、語りの中に見られるいろいろな経験やいろいろな考え方を否定せずすべてを同じように大切に別の結びつけ方があることに気づいた。それは、「そして」で様々な要素を緩やかに結びつけることである。例えば、「愛されなかったので愛せないという面がある、そして、愛されたので愛せるという面もある」という並列の結びつけ方である。この結びつけ方によって、異なる側面を自分の中で闘わせることなく、その存在を受け入れ、自分の中に位置づけることができるのではないと思う。

このように考えるようになったのは、前回の分析（糟屋, 2019）と本稿の間に、フォーカシング（Cornell, 2005）の考えを知り、「そこにあるすべてのものを否定せずに認めて耳を傾ける」「対立するように見える2つの部分の両方を認め、両方と一緒にいる」「一見、否定的に捉えられがちなところを、肯定的で、人生を前に進めるエネルギーがある部分として捉える」ことの重要性を知り、その影響を筆者が受けたことと関わっていると思う。「愛されなかったので愛せない」という面も、「愛されたので愛せる」という面もどちらも重要であることは、糟屋（2019）でも指摘しているが、本稿を書いていてどちらも重要な経験であり、この2つがハーモニーを奏でていることをより意識するようになった。これも、分析と考察を通して、分析者が「テーマと自己を発見していく」（Guba & Lincoln, 2005, p. 210）ことを示している。

⑧ 考え方の社会文化的・認知的要因を検討する

次の段階は、語り手がどうして特定の考え方の枠組みを持つようになったのか、その背景を社会文化的・認知的な側面から考察する段階である。

ディスコース分析の特徴は、ディスコースは「個人によって生み出されながら個人を作り上げ」、「社会や文化によって枠づけられながら社会や文化に影響を与える」(能智, 2011, p. 263) と考える点であり、ディスコースにおける考え方の枠組みには社会文化的背景が大きな影響を与えている (Fairclough, 2003) という立場に立っていることである。能智 (2011) が指摘するように、ディスコース分析においてデータを見るうえで注目するのは、「データがどのような〈現実〉のバージョンを提示しようとしているのか」「その提示はどのような文化的リソースに影響を受けているのか」「コミュニケーションの文脈の中でどのような行為や働きかけになっているのか」(p. 265) である。これまで見てきた分析過程の「(2) データ分析の段階」の⑤、⑥は「データがどのような〈現実〉のバージョンを提示しようとしているのか」というディスコースによる物事の意味づけを明らかにする段階であり、「(3) 分析結果の考察の段階」の⑦、⑧は、「その提示はどのような文化的リソースに影響を受けているのか」「コミュニケーションの文脈の中でどのような行為や働きかけになっているのか」など、ディスコースの社会文化的背景にあるものを見たり、ディスコースの及ぼす影響を見る段階であると言える。

例えば、語り手の「親の存在をとて意識する」という捉え方の背景にある社会文化的要因を考察することで、この捉え方が、語り手個人の考え方に由来するのではなく、社会全体が持っている、「子どもの成長の責任は家族にある」という社会文化の影響を受けているのではないかと気づいていった。また、人は出来事の原因が何かを判断する際に、継続的にあるものよりも、新しく生じたものや一番目立つものを原因と捉えやすいという人間の認知の傾向の影響 (ゼックミスタ・ジョンソン, 1996) を受けていると考えていった。そして、このような社会文化的・認知的要因を意識することも、出来事に関する新しい解釈の可能性をもたらすのではないかと考えていった。

このように社会文化的・認知的要因を検討する段階は、Guba & Lincoln (2005) の質的研究の妥当性の1つである、「存在論的・教育的真実性 (ontological and educative authenticity)」(p. 207) に関わる部分である。すなわち、研究参加者および人々が、社会における出来事について、多様な側面を見て、様々な視点から、異なる見方で理解することを促進して、人々の批判的知性を高めることに貢献しようとしている部分である。

⑨ 分析・考察の内容について内省する

次の段階は、内省的に分析や考察を検討する部分である。分析結果はデータに基づいて言える範囲のものになって

いるか、全体はまとまって一貫しているか、分析結果や考察に矛盾はないかなどを検討した。もし語り手が分析結果を読んだとして何か役立つことはあるだろうか、考察で主張していることが、筆者の勝手な思い込みや押しつけになっていないかなどについて注意深く見た。また、他の研究者が読んだ場合、書いている内容はわかりやすく説明されているか、読みやすいか、分析内容や解釈がデータという根拠に基づいていることが伝わるように書けているか、何か役立つことは書けているか、なども検討した。

これは、分析結果を他者の目で見えるような感じである。ただ、この段階については、最後に意識して行なうが、それ以前の分析や考察でも、それぞれの部分を書く際に、常に、こうした姿勢で分析し、書き、修正してきている。最後にもう一度、確認のため、全体を見回して検討してみるということである。

この部分は、4.2で述べる自己省察に関わる部分である。Guba & Lincoln (2005) が述べるように、自己省察は、「私たちの生活を形作る二元性や矛盾やパラドックス」が研究のなされる方法に与える影響について、また、そうした矛盾が私たち自身や研究参加者との関わりに与える影響について、「自己に問いを投げかけるよう要求する」ものである (p. 210)。自己省察を行なうことは、分析の厳密さを高めるだけでなく、テーマや分析者自身についても新たな発見をもたらす、分析を深め豊かにすることを可能にすると考えられる。

以上が、「(3) 分析結果の考察の段階」である。分析の結果、明らかになった考え方の妥当性を検討し、その社会文化的背景や認知的要因を考えようとして、別の見方の可能性を探る段階である。これらの考察により、一つのデータの結果から示唆されることがわかり、分析結果の他の状況への転用可能性が展開していく部分である。また、筆者がフォーカシング (Cornell, 2005) の考えを知ったことで、データに対して以前の解釈とは違う見方もできるようになったように、解釈の妥当性を検討して、それまでの理解に合わない矛盾や新しい解釈の可能性に気づき、分析を深化させることができる段階であると言える。

4. 分析過程の振り返りの結果についての考察

以下、分析過程の振り返りの結果について考察する。4.1では分析プロセス全体のまとめを行なう。4.2では、質的研究の質の評価という観点から分析プロセスを考察する。

4.1 分析プロセスのまとめと考察

以上、分析過程を段階ごとに見ていったが、全体を通して見ることで、分析の段階と手法を整理したい。まず、分

析の過程には、段階性と循環性があった。あることがわかって初めて、それまで気づけなかったことが見えてくる。段階を進むにしたがって、データの理解が進み、そのことによって、データとの深い交流が可能になる。データとの交流が進むことで、また理解が深まる。ある段階で別の側面についての気づきがあることで、前の段階の理解が進むという循環がある。データを全体として捉えることで、部分を微細に見ることが可能になり、部分を微細に見ることで、全体の理解が進む。また、データの理解が深まり、語り手の思いを共有・受容することができて初めて、その背景を考えたり、別の捉え方の可能性を探ることができるようになる。さらに、社会文化的背景を考えることで語り手の考えについての理解が進むこともある。

また、書くことで分析・考察が進む段階がある。書きながら理解する、書くことで理解するということがある。複雑なものが、書くことでまとまって全体像ができて、前は見るができなかった部分も微細に見ることができるようになったり、簡単な説明から詳細な説明ができるようになったりするということが起こる。「書くことで分析・考察が進む段階」とは、今回のデータについて言えば、例えば、語りの中で、「～ではなかった」という言葉で終わっているパターンが繰り返し現れ、目の前にあったものよりも、なかったものの方に焦点が合っていること、そうしたことを語りの中の登場人物の視点から違った視点で見えてみることで、出来事の因果関係を「ので」「けれども」などで、別の結びつけ方をしてみることで、また、なぜ語り手がこのような考え方の枠組みを持っているのかという社会文化的・認知的要因を考えることなどである。いずれも、1つ1つの出来事ではなく、全体を通して書いてみたときに浮かび上がってくることや考察が進んだところである。こうしたことが、スクリプトのメモ書き、気づきや感想のまとめ書き、論文の原稿などを書くことで深まっていた。

分析・考察の順番に沿って振り返り、どのようなテキストの分析でも行なう共通の手順と、今回のテキストの分析に限って言えること、その場合は、他のテキストだったらどうするか、などについて整理してみる。まず、分析の準備を行なうが、①スクリプトを作って、番号や余白など分析の場を整えることや、②全体を理解するために何度も読むことは、どのようなテキストの分析でも共通して行なうことである。他のテキストでも共通して行なうことの中には、最初は予定していなかったが、分析を進める中で、こうやってみようと思ってきたこともある。例えば、メモをこれ以上書くとわからなくなるから、別の紙に書くことにした点(②)や、データが複雑で把握しきれない時は、エピソードを短文で書き出してみたり、暫定的に時系列などで

パート分けをして全体を把握しやすくしてみるなどの工夫をした点(③)である。

次に、このテキストの分析では、③、④で「愛されなかったので愛せない」という全体を貫くテーマが見つかったので、⑤で「愛されなかった」「愛せない」「愛された」「愛せる」という4つの要素で見た。他のテキストでは、その中心的なテーマを探し、そのテーマの分析方法について、テーマに応じてどういう分析の仕方をすればいいのか考えてみることになるだろう。テキストは複雑なので、すべてを見ることはできないし、何か中心となるものがないと全体をまとめて見ることが難しいため、中核になるものを見つけて分析する。本分析のように、このテーマが分析の最後まで中核であることもあれば、少しずつ変化していくこともあると考えられるので、初期の分析では暫定的なテーマと考えるとよいだろう。暫定的と考えた方が、他の要素を見つけやすくなるし、必要であればより包括的なものに変わっていく可能性を残した方がデータに忠実な分析ができると思う。

⑤、⑥、⑦、⑧の分析・考察の段階で行なったのは、3つの視点(「重みづけ」「因果関係」「登場人物の属性」)でデータを見ることである。この3つを分析の段階で明らかにしていたので、考察の段階で別の見方が可能でないかを検討することができた。例えば、語り手が軽く捉えているものの中に何か価値あるものがないか、結びつきを変えることで何か新しい可能性がないか、語りにおける登場人物と語り手の関係などの属性で何か新しい見方はないかなどである。⑥の部分の、語られている立場の人から見る視点は、3つの視点の1つである「登場人物の属性」を登場人物本人の立場から見てみるというものである。語りの中に出てくるけれど、一面的な評価をされているものを、その登場人物の立場から見てみることで、多様な視点から見ることにつながる。この3つの視点で分析・考察することは、今回の分析のテキストに限らず、他のテキストの分析や考察においても共通して使える手続きである。

語りに登場する人物の立場から見てみようとか、社会文化的・認知的な視点から見てみようというのは、分析・考察の終盤の段階である。それは、まずは、語り手の立場に立って、世界がどう見えているのかを理解すること(⑤)が重要だからである。それを理解し、共感してから初めて、語りの中にある別の捉え方の可能性(⑥)、捉え方の妥当性(⑦)や、社会文化的・認知的要因(⑧)を考えてみようという段階に移れると考えられる。そのうえで、最後に、分析と考察について内省する段階(⑨)がある。分析の実践を内省的に検討することで、分析の厳密さ・妥当性を確認すると同時に、新しい解釈を生む可能性のある段階である。

こうして振り返ってみると、以上のような順番で分析が進んでいったということがわかったが、なぜ前の段階では気づかなかったことにある時点で気づいたかは理屈では説明しきれないこともある。データという材料があり、分析で結果が出てくるだけの情報はテキストの中にあっただけなのに、ある時点では気づかなかった。スクリプトを見ていた時の分析の段階では気づかなかったことに、書く段階で気づいていった。こういう出来事について、前の段階で行なっていたことが不十分であったと考える必要はないだろう。手順を踏んで分析を進めていって、その段階になって、出るべくして出るようになったということではないだろうか。例えば、分析者が理解を深めることで先に進むことができるようになったということが、分析プロセスの②、③、④、⑤、⑥、⑦などの各段階で起きていた。

このような段階で起きていたことは、分析者の中でいろいろな要素の熟成が進んで、全体像が見えるようになって、条件が整ったことで気づけるようになったと言うことができるであろう。すなわち、分析者自身の中で起こることも、分析の要素として入っているということではないかと考える。分析者もデータや分析手法と同じように、分析の要因の1つとして加わっている。こうしたことを認め、こうした出来事を客観的でないなどとして排除しないことが、質的研究の研究姿勢であると言える。

4.2 質的研究の評価と分析プロセス

最後に、質的研究の質の評価との関連で本分析プロセスを考察したい。質的研究の評価の基準として妥当性 (validity) がある。妥当性は、客観性とは異なり、「研究結果が十分に信用でき」、「その示唆することに基づいて確信を持って行動できるか」ということである (Guba & Lincoln, 2005, p. 205)。質的研究の妥当性を高めるための視点として、能智 (2005) は、Lincoln & Guba (1985) をもとに、信用性 (credibility) と転用可能性 (transferability) を指摘している。

まず、信用性を高める方法については、「仮説をデータに戻って検討する」(能智, 2005, p. 92) ことが求められている。「質的分析の過程で概念間・要素間の関係が仮説的に見出された場合」、データに戻って仮説を検討することで、「仮説がより確かなものになったり、あるいは精緻なものになったりする」(能智, 2005, p. 92) ということがある。このテキストの分析では、語りを繰り返し読んでいるうちに、その苦しみは「愛されなかったので愛することができない」というところにあるのではないかと思いついたので、語りの中にある「愛する」に関わることをすべて見てみることにし、「愛されなかった」「愛された」「愛せ

ない」「愛せる」に関連すると考えられる部分を抽出した (分析プロセス⑤)。このことにより、仮説をデータで検証するというを行なっている。そのことにより、Guba & Lincoln (2005, p. 207) で妥当性 (validity) の要素の1つとされている「公正さ (fairness: ストーリーのすべての要素を大切に公平に扱うこと)」を高めることにつながっている。また、こうしたことを可能にしているのは、分析プロセス①、②、③、④で、全体をとらえる準備をしていることがある。さらに、データの検証ということについては、分析プロセスで見たように、③、④で全体を貫くテーマを理解して、その後、⑤、⑥で微細に分析し、また④に戻ったり、⑦、⑧で分析結果の考察をすることで、また⑤、⑥の分析結果を検討するというように、結果・考察を書きながら分析が循環し、十分説明できるかという点からも検証が行なわれていると言える。

信用性を高めるには、トライアンギュレーションという方法がある。Denzin & Lincoln (2005) によれば、トライアンギュレーションとは、客観的な現実を捉えるというのではなく、現象を深く詳細に理解するための試みであり、競合する見方を探求して多面的な現実を表すことで、研究に「厳密さ・広さ・複雑さ・豊かさ・深さを加える」ものである (p. 5)。方法として、複数の視点から見るということがあり、「ある視点において見出されたことに対して、別の視点から見ても同じようなものが得られるかどうかチェックする」(能智, 2005, p. 92) ことである。本分析では、⑤、⑥、⑦、⑧の分析・考察において、「重みづけ」「因果関係」「属性」という3つの視点から見るということをしている。それぞれの視点から見たときに、語り手が「愛されなかったので愛せない」という現実を見る枠組みを持っていることが一致して見られた。また、実際には「愛されたし、愛せる」ということが起きていることも、3つの視点から検討することで一致して見ることができた。さらに、語り手から見た視点だけではなく、語りに登場する人々からの視点で語り手を見たときにどのように見えていたかを、語りの内容から考えることも試みた。このようにして複数の視点から見ること、分析結果の信用性を高めることができ、また同時に、語りの捉え方、語りから見られる別の捉え方、捉え方の妥当性など、多面的な見方から分析を深めていくことができる。

また、トライアンギュレーションには、「他者の視点を導入して仮説を確かめる」、他者の目からデータやその解釈、研究結果、推論の根拠などについて検討してもらう (能智, 2005, p. 92) という方法もある。分析の様々な段階で、分析における解釈が納得のいくものが複数の視点で見ることによって信用性を高めることができる。本分析の場合は、

共同研究者に分析結果を読んでもらいコメントをもらったり、学会で一部を発表してコメントをもらうことなどをして、分析結果を検討する、ということをしている。このように、質的研究では、分析途中の段階でも、原稿を書いているところで他者に読んでもらって、コメントをもらって検討したり、学会などで発表してコメントをもらったりすることが大切である。能智（2005）によれば、他者が自分の解釈と違う解釈をした場合、そういう意見があったことを踏まえて、それを取り込む形でバージョンアップさせることで研究を深化させることができる。そういうところに突破口があり、また多元的な分析を深める機会があることを知っていることが重要であると思う。語りの中でも葛藤のあるところに契機があるのと同様に、分析過程についても葛藤のあるところに契機があることを意識すれば、様々な葛藤を恐れることなく、見据えることができるのではないかと思う。このことは、本稿で、分析過程の振り返りをして特に認識した点である。

質的研究の質を高めるには、信用性に加えて、転用可能性が重要である。転用可能性とは、「特定のデータから得られた命題をそのデータ以外の何事かの理解や洞察などに利用できるかどうか」（能智，2005，p. 93）ということである。本分析では、分析プロセス⑥、⑦で、「語りの中にある他の捉え方」を見て、その「妥当性を検討」している。さらに、分析プロセス⑧で、「考え方の社会的・認知的要因を検討する」ことで、研究参加者および人々が、出来事の多様な側面を多様な視点から見ることが促進する、批判的知性を高めることに貢献することを試みている（「存在論的・教育的真実性（ontological and educative authenticity）」）。それによって、児童養護施設経験者に限らず、自分の属する社会や文化で当たり前とされるものが手に入らないことで苦悩を感じている人や、その結果生じている問題という他の状況にも、この分析結果が転用できるのではないかと考えられる。「重みづけ」「因果関係の設定」「登場人物の属性」の与え方を検討することで別の見方の可能性を探るという姿勢は、今回の分析以外のデータや、社会の人々の置かれている状況の理解や洞察に役立てることができると考えられる。

さらに、妥当性を高めるものとして、「研究者と研究参加者や人々との倫理的関係」がある。これは、分析者が研究参加者などよりも多くを知っているという立場で研究参加者の語りを分析するという姿勢ではなく、分析者も探求者であり、研究参加者や人々と対等で「互酬的な関係」にあることを意味する（Guba & Lincoln, 2005, p. 209）。そこでは、分析者は研究の過程を通じて自己省察を行ない、テーマや自己を発見し、研究者としての自己を批判的に内

省する中で、研究の過程でさまざまに変化する自己を意識的に経験していく（Guba & Lincoln, 2005）。この点については、分析プロセス①、②、⑤、⑥、⑦、⑨などで述べてきたように、分析の過程を通して、常にそのような倫理的関係があったと思う。また、本稿のような分析過程の振り返りでも、自己省察が深まり、テーマと自己の新たな発見が進行していると言える。

以上のように、質的研究の質の判断基準としての妥当性を高めるためには、信用性・転用可能性・研究参加者との倫理的関係などの視点がある。本研究プロセスでは、信用性に関して、データによる検証・トライアンギュレーションにより、データの全ての部分を公平に扱い、多様な視点から見た分析を行っていた。また、転用可能性に関して、人々が出来事の多様な側面を多様な視点から見ることが促進する批判的知性を高めることを試みていた。さらに、研究参加者との倫理的関係に関して、自己省察を行ない、テーマや自己を発見する姿勢を持つよう努めていた。このように、分析プロセスの各段階で、公正さ、多様性、自己省察を重視する態度を持ち、それらに基づいて具体的な手順が行なわれることで、質的研究の質を高めることを試みていたと言える。

5. むすび

今回、本稿をまとめるために、分析を振り返り、自分の思考と気づきを辿ってみた。こうして振り返ってみると、分析は段階を追うごとに、少しずつ深まっていくことがあらためて感じられた。また、振り返ることでまた新たな気づきがあったことから、分析は終了することではなく、常に進行中だと言えると思う。このことは、Rapley（2018）も、ディスコース分析におけるもっとも重要な側面として、「分析は常に継続しているプロセス」（p. 141）と指摘している。そうしたことを理解したうえで、どこかで分析にいったん区切りをつけてまとめることが必要になる。まとめて、可能ならば公表し、そして、その後も、また思考を続けていくことが大事であると感じた。それぞれの段階で、現時点ではこれで十分見た、と思えるところ、具体的には、だいたい要素が出尽くしたと感じるところで分析結果を公表し、分析結果について他者の考えを聞くこと、そのことによってさらに分析を深めていくことが重要である。

そうした、研究の持続性・発展性に対するおらかな気持ち、ゆったりした気持ちが緻密で微細なディスコース分析を支える重要な部分であると思う。また、欠損・葛藤・矛盾など、否定的な側面と捉えられがちなところに飛躍の契機があることが、語りの中にも、語りの分析にも、また研究のプロセス全体を通してとも言えることをあらためて

認識した。本稿を読み返すと、「分析の負担」という言葉が何回か現れるように、ディスコース分析は他の質的研究と同様に、分析者にとって、ある意味負担の大きい分析方法ではないかと思う。しかし、同時に、多くのことを考え、分析者の思考に変化をもたらす、有意義な旅に誘ってくれる研究方法であると思う。研究における葛藤や矛盾などの側面を否定せず受容して分析を進めていくことで、より包括的な深い研究が進んでいくのではないかと考える。

本研究はJSPS 科研費 16K02606 の助成を受けたものである。本研究の一部は日本質的心理学会第14回大会(2017年9月)で発表した。

謝辞

糟屋 (2019) のインタビューにご協力いただいたAさん、また、共同研究者の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- アドラー, アルフレート (1984). 『人生の意味の心理学』高尾利数訳 春秋社 (Adler, Alfred (1932). *What life should mean to you.*)
- Cook, Guy (1989). *Discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- Cornell, Ann W. (2005). *The radical acceptance of everything: Living a focusing life*. Berkeley: Calluna Press.
- Denzin, Norman K., & Lincoln, Yvonna S. (2005). Introduction: The discipline and practice of qualitative research. In Denzin, Norman K., & Lincoln, Yvonna S. (Eds.), *The Sage handbook of qualitative research Third edition*, pp.1-32. London: Sage Publications.
- Fairclough, Norman (1995). *Media discourse*. London: Edward Arnold.
- Fairclough, Norman (2003). *Analysing discourse: Textual analysis for social research*. London: Routledge.
- フランクル, ヴィクトール E. (2002). 『夜と霧』池田香代子訳 みすず書房 (Frankl, Viktor E. (1947). *Ein psychologe erlebt das konzentrationslager.*)
- フロム, エーリッヒ (1991). 『愛するということ』鈴木晶訳 紀伊國屋書店 (Fromm, Erich (1956). *The art of loving*. New York: Harper Collins Publishers.)
- Guba, Egon G., & Lincoln, Yvonna S. (2005). Paradigmatic controversies, contradictions, and emerging confluences. In Denzin, Norman K., & Lincoln, Yvonna S. (Eds.), *The Sage handbook of qualitative research Third edition*, pp.191-215. London: Sage Publications.
- 糟屋美千子 (2012). 「テレビニュースのディスコースによる考え方の枠組みの構築—「全国一斉休漁」のニュースの事例から—」『社会言語科学』 14(2), 31-44.
- 糟屋美千子 (2014). 「テレビニュースは人々の抗議行動をどう描いたか—沖縄普天間基地移設計画に伴う環境影響評価書提出に関するニュースのディスコース分析—」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 16, 23-38.
- 糟屋美千子 (2019). 「ライフストーリーにおける考え方の枠組み—児童養護施設経験者の語りのディスコース分析—」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 21, 41-60.
- Labov, William (1972). *Language in the inner city: Studies in the black English vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Lincoln, Yvonna S., & Guba, Egon G. (1985). *Naturalistic inquiry*. Beverly Hills: Sage.
- メイナード, 泉子 K. (1997). 『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』くろしお出版
- 能智正博 (2004). 「質的データの分析—データの読みという視点から—」『児童心理学の進歩』 43, 271-293.
- 能智正博 (2005). 「質的研究の質と評価基準について」『東京女子大学心理学紀要』 1, 87-97.
- 能智正博 (2011). 『質的研究法』東京大学出版会
- Rapley, Tim (2018). *Doing conversation, discourse and document analysis*. London: Sage Publications.
- Richardson, Laurel., & St. Pierre, Elizabeth A. (2005). Writing: A method of inquiry. In Denzin, Norman K., & Lincoln, Yvonna S. (Eds.), *The Sage handbook of qualitative research Third edition*, pp.959-978. London: Sage Publications.
- 鈴木聡志 (2007). 『会話分析・ディスコース分析—ことばの織りなす世界を読み解く—』新曜社
- ホワイト, マイケル (2009). 『ナラティブ実践地図』小森康永・奥野光訳 金剛出版 (White, Michael (2007). *Maps of narrative practice*. London: W.W. Norton & Company.)
- ゼックミスタ, ユージン B.・ジョンソン, ジェームス E. (1996). 『クリティカルシンキング 入門編』宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池聡訳 北大路書房 (Zechmeister, Eugene B., & Johnson, James E. (1992). *Critical thinking: A functional approach*. Belmont: Thompson Brooks Cole Publishing Co.)

(令和元年11月30日受付)